

Title	民族の表象と伝統の変化の動態：インド， アルナーチャル・プラデーシュのモンパを中心に
Sub Title	
Author	脇田, 道子(Wakita, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010.) ,p.168- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成21年度博士学課程生研究支援プログラム研究成課報告書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

有用であろう。

本研究ははまだ途上であり、今後さらなる資料の集積を通じて初めて高度経済成長期における神楽の世界が見えてくると考えられる。本研究、そして、今後の研究を通じ、高度経済成長期という日本の変革期における、農山村部の芸能の姿を分析し、経済的側面から民俗芸能を分析するモデルケースを構築し、高度経済成長とは何だったのかを今後も考えていきたい。

注

- 1) 本研究では高度経済成長期を、岡山県水島臨海工業地帯が造成開始された1953年から、第一次オイルショック後の1975年までと便宜上位置づける。もちろん高度経済成長の時期の設定は簡単ではないが、本研究の主旨が神楽資料を基に、神楽の同時代の変化をたどるものである以上、上記の位置づけで話を進める。
- 2) 会計帳といった帳簿類の他、神詞集や自身が率いた大賀社の神楽の記録など約200点ほどが残されている。
- 3) 表は県北部の人口動向の一事例として備中神楽を行っている美星町を提示した。
- 4) 社中数の動向について、岡山県神社庁に問い合わせたところ、社中数は無形民俗文化財指定を受けた1979年の直後が最大であり、それ以降は緩やかな減少が続いていると聞く。

主要参考文献

- 神田より子1990「神楽の『経済学』—陸中沿岸地方の神楽資料から—」岩田勝編『神楽 歴史民俗学論集1』名著出版
- 俵木 悟1999「備中神楽の現代史」『千葉大学社会文化科学研究』3
- 山本宏子1994「民俗芸能の経済学」に向けて—一門付け型芸能（獅子舞・虎舞・エイサー）とその経費—『民俗芸能研究』19

民族の表象と伝統の変化の動態

—インド、アルナーチャル・プラデーシュのモンパを中心に—

脇 田 道 子

1. 問題の所在と研究の目的

インド、アルナーチャル・プラデーシュ州のモンパは、インド、中国、ブータンという二つの大国、一つの小国の狭間に生きる「国境の民」である。中国側では、彼らは「門巴族」として中国の55の少数民族に数えられ、インドでは憲法で認められた指定トライブの「モンパ」と称されている。また、国境を隔てた東ブータンの山岳地帯に住む牧畜民「ブロクパ」¹⁾も同じ民族衣装を身につけていることから、同じ民族、あるいはその支族ではないかと考えられてきた。

かつては、チベットのラサから見て、ヒマラヤ南麓の蛮族の住む地を含意した「モンユル」に住む人びとの総称がモンパであったが、現在は、インド憲法において、後進性をもつトライブとして指定され、そのトライブ名となっている。その総称がいつどのような経緯で彼らのトライブ名になったかはまだ明らかでない。国ごとに、「民族」、「トライブ」、「牧畜民」と呼び分けられている人びとの関係を近代的な国境を無化して国民国家を超越した視点で見直し、トライブであるモンパという民族集団がどのよう

に生成されてきたのか、そしてどのように表象され、その伝統がどのように変化し現在にいたっているのかを動態的にとらえ、考察することが本研究の目的である。

アルナーチャル・プラデーシュ州は、中国政府発行の地図ではそのほとんどが中国領となっているように、中印の間で国境が画定されておらず、モンパが住む地域は1959年のダライ・ラマ14世のインド脱出の際のルートでもあり、1962年には中印国境をめぐる武力闘争が繰り広げられた地域でもある。紛争以来、中印国境（マクマホン・ライン）を越えて互いに往来することが不可能となったため、門民族、モンパともに伝統的なチベット文化の影響の強いモンユルから、政治的にも文化的にもそれぞれの国家に統合されつつある。これはブータンのプロクパにも同様にあてはまる。彼らは、現在でも山岳国境を越えて、インドとの往来を維持しているが、以前あったモンパとの通婚関係も両国の国籍法によりしだいに薄れ、それぞれの国への帰属意識は年々強まっている。いずれの地域も外国人の入域を制限しているが、インド、ブータンの国境地域へは、特別許可を得て入域することができる。中国側はチベット問題を抱えることもあり、現在は、完全に入域禁止となっている。

2008年ごろから、アルナーチャル・プラデーシュに対する中国からの情宣活動が増え、現地の若者たちの間では中国に対する抗議行動が目立ってきている。また、中国が上流で大型ダム建設を計画しているという噂があり、それに対する抗議の声も地元ではしだいに高まりつつある。また、バングラデシュからの難民の州への流入も、生活圏を脅かすものとして問題がしだいに表面化してきている。

こうした外部からの脅威とは別に、近年になって、首都ニューデリーのアルナーチャル・プラデーシュを含む北東諸州からの学生が多く住む地区で学生が暴行を受けるなどの事件が頻発している。これらの事件を通して、北東諸州の若者たちは、インドの中で「差別されている」、「蔑視されている」という意識をますます募らせている。国内外との軋轢を通して、モンパをはじめ25を超えるトライブからなるアルナーチャル・プラデーシュの人びとのエスニック・アイデンティティの醸成と再生産はしだいに強まる傾向をみせているといえる。

2. 民族衣装を通してみるモンパの民族生成

1950年に施行されたインド共和国憲法によって、モンパは「指定トライブ」として認定されたが、居住地域によって人びとの言語、来歴はさまざま、モンパ語といった共通言語は存在しない。チベットが故地であると見られる集団、ブータン東部とのつながりが強い集団、南のアッサムに住む集団と言語に共通点がある集団など細分化されている。とりわけ、モンパ間の言語の違いは大きく、互いのコミュニケーションには、アッサム語やヒンディー語が使用されているのが実情である。

19世紀のイギリス行政官、Alexander Mackenzie (1842-1902) の記録²⁾の中にはモンパという呼称はまったく見られず、ブティア(Bhutia)という名称が使われている。たとえば、タワン・ブティアという呼ばれ方である。モンパがモンユルに住む人びとの総称であったことは先に述べたが、そのモンパが「指定トライブ」に区分される過程で、どのような基準でモンパとされたのかは、明らかではない。

しかし、現地調査を続けているうちに、各地のモンパがその起源や言語を異にしなが、同じ民族衣装を着ることによって、しだいに統合への道をたどっていることがわかってきた。そしてその材料である糸や染料の入手方法を調べることによって、モンパがブータン、アッサム、そしてアルナーチャル・プラデーシュ内に隣接して住む他の民族集団との関係性の中で、その民族衣装を選択してきたことが考察される。

3. 2009年度の研究概要

年度の前半は、2009年3月から4月にかけて約1カ月間実施したアルナーチャル・プラデーシュでの現地調査のデータのまとめをした。この調査で再確認したことは、州全体にいえることでもあるが、モンパの住む西カメン県もタウン県もここ10年以上の間、インフラの整備がまったく進展せず、あらゆる開発から取り残されたままであるということであった。

小規模な商店の数は増えているが、その多くはモンパが「平原の人」とよぶ他州からの人びとがモンパの名義で経営している店である。西カメン県のラマ・キャンプでは、全30店の商店のオーナーの出身地を調べたが、モンパが経営しているのは9軒だけで、あとはすべてビハールなど他州出身者であることがわかった。祖父の代からここで商売をしているという人もいる。他州からの人びとがアルナーチャル・プラデーシュ州に入域する場合にはインナー・ラインパーミットが必要で、永住は認められていないはずであるが、これは建前上のことで、実際には州の各地が同じような状況にある。ラマ・キャンプでの調査結果もそれを裏づけるものであった。

西カメン県のルブラン村はブータンとの国境に近い牧畜民の村で、過去にも2回調査をしているが、ガオンブラ（村長）が交替したことにより、以前とは違う発見があったものの、村は相変わらず貧しく、過疎化が進んでいた。村の小学校には若い女性教員が2人赴任してきていたが、彼女たちの口から、生徒に当然支給されるはずの食糧や補助金が途中で役人たちにより搾取されている現状を聞かされた。抗議をすれば職を失うため、それを黙認しなければならないという。教室の窓を閉めると電気がないため暗いので、窓を開けざるをえないが、ガラスがないので寒風が吹きこんでくる。低学年の子供たちには机もイスもない。床に座り、寒さに身を縮めながら授業を受けている子供たちの学習環境は、2005年の調査時からまったく改善されていないどころか、ますます劣悪になっていた。

タウン県ゼミタンのゴルサム・チョルテンでの仏教の法要祭に集まった人びとへのインタビューなどから、ゼミタンのパンチェン・モンパのチベットとのつながりを調べようと試みたが、1959年のダライ・ラマ14世の亡命時の記憶がある人びとの情報は不確かで、チベット側の門巴族との関係についてはまだ不明なことが多い。この点は2010年度に集中的に調査する予定である。

この法要祭を運営した地元の組織は、旅行会社も巻き込んで、インド内地や外国からの観光客を集めたいとツーリズムに期待を寄せていた。しかし、宿泊設備、道路事情などインフラ整備の資金はまったくなく、ツーリズムのノウハウのある人もいないなど問題は多い。こうした中で、法要に集まる人びとが以前よりも多く民族衣装を身に着けているという状況が観察された。法要の主役であるリンポチェには2003年にも会ったことがあるが、インタビューしたところ、彼が説法の中で、人びとにトライブの文化を保持するために法要にはかならず民族衣装を着て集まるよう指導しているという。このリンポチェはかつて州の観光大臣を務めたこともあり、人びとが民族衣装を着ることをツーリズムの戦略の一つだと考えているという。貧困克服のためのツーリズムの可能性を以前から模索しているリンポチェにとっては、エスニック・アイデンティティを表象する民族衣装を着用させることもその手段として有効であるという信念を持っている。しかし、宣伝不足から、地元の人びとだけでなく、各地からも数百人のモンパがトラックの荷台に乗って、野宿しながら集まる重要な法要祭であるにもかかわらず、外国人はおろか、内地からのインド人観光客も一人も見学に訪れていなかった。

この調査は、辺境の貧困問題を克服するためのツーリズムの可能性について筆者に新たな課題を与えるものとなった。従来の研究に新たにツーリズムが加わったわけであるが、上記の例のように、モンパ

の伝統の変化を動的にとらえるためには重大な要素になると考える。

4. 今後の課題と2010年度の目標

「モンパとは誰か」という大きな問題については、まだ明らかになっていないことが多いが、これまでの調査の結果や集めた資料を整理し、それを分析することに時間を割きたい。伝統とその変化というテーマを深く考察する手段として、2010年の現地調査では、従来のモンパの村での調査に加え、対中国に対する抗議やさまざまなトライブの地位向上や権利保護などについて積極的に発言を続けている全アルナーチャル・プラデーシュ学生ユニオン(AAPSU)³⁾を取材し、その団体の実態とかれらの主張について調査、分析を試みる予定である。

注

- 1) ブロクパ(Brokpa)はブータンのゾンカ語で牧畜民を意味する。
- 2) Mackenzie, Alexander 2001. The North East Frontier of India. New Delhi: Mittal Publications. 原著は、1884. History of the Relation of the Government with the Hill Tribes of the North East Frontier of Bengal.
- 3) ウェブサイトにはその前身は1947年に創設されたとある。(http://aapsu.com/history.php)

精神疾患新分類〈関係障碍〉を導入する影響と治療の 変化の生命倫理—医療人類学的研究

大 沼 麻 実

本研究課題に取り組むべく、二つの方向性からアプローチを試みた。第一に、アメリカ精神医学会によって疾病分類化が検討されている〈関係障碍〉に関する論文や報告書を調査・分析した。〈関係障碍〉は、関係するメンバーとの接点あるいはきずなに存在する障害であり、個人の診断には還元できないものとして特徴づけられている。特に、家族は〈関係障碍〉が問題として顕在化しやすい場である。ゆえに本年度は臨床現場からこの概念の成立について考察すべく、特に近年注目を集める依存症の治療に関わる病院や自助グループでフィールドワークを実施したほか、依存症者へのインタビューや治療に携わる医師へのインタビューを行った。つまり研究のもうひとつの方向性として、「関係性に問題を抱える家族」および「家族の問題をシステム論の視点から捉え〈回復〉に向かおうとしている家族」に対するアプローチを行ったのである。

調査方法としては、第一にアルコールや薬物といったアディクションの治療を行っている群馬県にあるA病院に滞在し、家族教育プログラムに参加した。プログラムでは、家族がソーシャルワーカーや看護師から依存症についての基本的知識を学んだり、専門家が関わらない形で家族同士が語り合う家族会や、一定の〈回復〉状態にある依存症者が家族会のメンバーに向けて話をする「メッセージ」などが行われている。一般的な病院では、家族向けのプログラムを設けているところでも、実施状況は月に1~2回であり、多くても週に1回程度である。それに対し、当病院では、週4日、午前・午後ともに家族向けのプログラムが組まれており、各日15名~20名ほどの家族が参加し、それ以上の人数になることも